海外交流

大阪大学　世界言語研究センター アラビア語研究室・アラビア語教育・アラブの言語事情・アラビア語早分かり

高　階　美　行*

The Arabic Department (Research Institute for World Languages/ Osaka University) and the Briefest Sketch of Arabic Language

Key Words：Arabic Language, Arabic Teaching, Diglossia

１．アラビア語研究室と専攻語教育

研究室では、竹田新教授（イスラーム地理学を中心とする文化論）、藤井章吾准教授（口承文芸を含むアラブ現代文学）、近藤久美子准教授（アラビアンナイトなどのアラブ文学）、高階美行教授（アラビア語を中心とするセム語学）の日本人４名と、外国人特任教員（語学教育・研究）のホサーム Hosam Ahmed Kasim 先生（アラビア語学、カイロ大学アラビア語学科より派遣）の計５名が、外国語学部アラビア語専攻と大学院における教育を担当し、各自の専門による研究活動に従事しています。

多数のアラブ諸国が存在し国連公用語ともなっているので世界標準では大言語ですが、日本では認知度も低いままですし易しい言語ではないので、学生（各学年25名）に対しては４年間一貫した専攻語教育により、徹底した語学運用能力の養成に努めています。言語の運用能力を身に着けさせることは、言語使用者たちの社会や歴史文化のオールラウンドな知識を教育し、その文化の枠組みで違和感なくコミュニケーションできる語学力を養成することですから、狭い意味での語学教育ばかりをしているわけではありません。アラビア語が使用される地域のイスラーム圏の価値観や社会の仕組みは日本で馴染みがないこともあり、専攻語教育の鬼となって学生諸君を叱咤激励しつつ教育に当たることが、大学や社会に対する責務であると考えています。

もちろん、こうした幅の広い素養を身に付けた人材の養成には専任教員だけではカバーしきれないので、学部教育では文化・社会・方言などの専門家にも非常勤講師として助力を求めています。

２．日本におけるアラビア語教育とアラビア語専攻

現在、日本には約50の大学で何らかのアラビア語教育が行われています（2005年５月の日本中東学会第21年次大会で筆者が公表したデータ）が、日本でのアラビア語教育は（旧）大阪外国語大学の前身である大阪外国語学校のインド語部・マレー語部の選択第二語学として松本重彦先生がアラビア語を教授（学生約17名）したのが始まり（1925年）です。このように、わが国のアラビア語教育と大阪大学は深い関係にあります。この当時、アラブの独立国はまだエジプトしかなく、日本の主たる関心はアジアのイスラーム世界にありました。

独立した語部となったアラビア（亜剌比亜）語部（1940年、学生定員15名）は、戦後に大阪外国語大学アラビア語学科となり、やがて東京外国語大学にもアラビア語科が新設（1960年）されました。オイルショック（1976年）の結果、大阪では教育規模の拡充（日本人教員５名、学生定員25名）があり、現在の基本的体制となりました。

社会で活躍する同窓生は1130名（2009年４月時点、物故者は除外）に達し、多様な実業界で活躍しています。全員がアラビア語を使う職種でないことは無論ですが、国際関係の仕事（大使２名ほか）をはじめ、主要メディア（論説委員、解説委員、編集委員、記者）、大学教員、教師として活躍中の人材も少なくありません。９・１１事件（2001年）後はアラビア語教育を提供する大学も倍増しましたが、先輩

*Yoshiyuki TAKASHINA
1949年3月生
京都大学大学院・文学研究科博士課程言語学専攻（単位取得退学）（1976年）
現在、大阪大学世界言語研究センター中東・アフリカ言語文化圏研究部門　教授　文学修士　アラビア語学、セム語学
TEL：072-730-5302
FAX：072-730-5302
E-mail：takasina@world-lang.osaka-u.ac.jp

諸先生方が築いた、全ては徹底したアラビア語教育があってこそとの伝統を守り、アラビア語教育機関の中核としてさらなる発展を目指しています。

3．言文「不」一致のアラブ諸国

さて、アラビア語を紹介するためには、前置きが必要です。

周知のようにアラブが生んだイスラーム文化の根幹クルアーン（7世紀）はアラビア語で書かれており、膨大な人類遺産としてのイスラーム文化の所産は時空を超えて、この言語を規範としてきました。分かりやすく言えば、広大な地域で様々な母語を持つムスリムたちは、時代や場所を越えて同一の言語を書き言葉として学び記録してきました。

ところが、アラブ人が母語として使用するアラビア語は現在までに大きな言語変化を経て、地域ごとに多様な話し言葉を方言として発展させてきました。現代日本語が聖徳太子時代（7世紀）の言語と異なったり、ローマ帝国の各地域で姉妹関係にあるイタリア語やフランス語やスペイン語が生まれているのと同じ現象です。この話し言葉は、言語変化のせいでアラビア文字表記が困難であるうえに、聖典クルアーンに近い書き言葉を大切にするという強固な意識があり、文字表記されることはありません。

概略13世紀以降は異民族支配を受けてきたアラブ世界が、第二次世界大戦後に独立を獲得した時、域内ではこうした言語状況でした。被支配のもとでも近代以降は様々な言語改革が行われ、メディアを中心として語彙の適応や文構造の簡略化により「現代標準アラビア語」が登場してはいましたが、書き言葉の枠内でした。独立時点でいずれのアラブ諸国も、公用語はアラビア語と定めました。つまり、アラブ世界で共有される書き言葉を公用語としたのです。国は違っても、アラブ民族としての意識とアラビア語による文化遺産の継承者としての自負に基づく選択でした。

この結果、アラブ諸国では印刷物と公的場面での会話は書き言葉、私的場面での会話は母語たる話し言葉（各地域での方言）という「二重言語使用」（diglossia）の状況にあります。どの言語にも多少とも書き言葉と話し言葉の違いがありますが、ラテン語とイタリア語が別の言語であることを承認するなら、アラブ諸国では社会的場面に応じて異なった言語を使用していることになります。

こうした中で、アラビア語専攻ではアラブ世界で共有される現代標準アラビア語を教育し、話し言葉は3年次以降にアラブ人口が最大のエジプト方言の授業を提供しています。書き言葉をしっかり身につけた者は、それとの対応関係が明瞭なので、各地域の話し言葉は半年もあれば、徐々に話すことができるようになります。

4．アラビア語世界の広がり

アラビア語はアラブ諸国（18カ国とパレスチナ）のほか、6カ国で公用語（に準じる地位）とされています。この中でいわゆるアラビア語と呼ばれる言語には、次のような違いがあります：①アラブ諸国の書き言葉（現代標準アラビア語）、②アラブ諸国とアラブ人が少数派である隣接地域でアラブ人が母語とする話し言葉（方言）、③イスラーム文化の言語として世界中のムスリムが使用する書き言葉（①に近いがその規範が及ばず古典語に似る）、④非アラブ人で非ムスリムが歴史的経緯の中で習得し母語として使用するアラビア語方言、⑤アフリカのサハラ以南や湾岸地域でアラビア語を母語としないものの間で使用されるアラビア語ベースの媒介言語。

このうち、⑤は決して小さくない話者集団でスーダン南部では100万前後と推定されています。また、アラビア文字表記されるのは①と③のみで、いくつかを除いて音声言語としてのみ存在します。

5．アラビア語早分かり

以下には残った少ないスペースで、現代標準アラビア語の大きな特徴のみを紹介します。

1）アラビア文字と発音

28文字からなるアルファベットで右から左に（RTL，Right-to-Left）書きます。原理は単語単位の一筆書きですから位置による異字形が存在し、字形は100に近い。母音字が存在しないので、表音文字であっても、学ばないと近似音すら発音できません。これは同じ文字でも、文脈で読み方が決まる日本語の漢字と似ています。発音は口の奥や喉で出す音（ع [ʕ], ق [q] など）が多いことや珍しい軟口 蓋化子音（ط[ɫ],ص[s] など）が多いので、難しいと言えます。

2）人称と動詞変化

アラビア語は語形変化がやたらと多い屈折（語尾変化と語幹の交替）言語なので、暗記に苦労します。数の概念には複数に加えて双数があり、性の区別（男女）もあるので、人称は13種類あることになります。そのそれぞれに応じて動詞の活用形は語尾変化するので、「書く」という動詞の現在表現をするには13形を覚える必要があります。動詞は完了・未完了・5種類の法・受身形などの区別があるので、単一の規則動詞を使いこなすには、合計162形を暗記します。不規則動詞については気が遠くなるので、ご想像にお任せします。

3）名詞と形容詞の複数形

規則複数もありますが、最大の特徴は大半の語彙で単数用の語幹と複数用の語幹とが交替するので、一つの語彙が二つの形を持っていることです。この両者間の対応に規則性はありません。大半の語彙が英語のmouse/miceのような関係なのです。格変化は3種類（主格、属格、対格）なので、単純といえます。

حرف　「文字（単）」　ḥarf　ハルフ（近似音）

حروف　「同（複）」　ḥurūf フルーフ

4）性と数の関係

奇妙なことに人間以外の概念の語彙は、男性名詞でも複数では女性単数扱いします。つまり、性の区別は単数のみで有効であり、複数の世界になると人間か非人間かのカテゴリーが優先するのです。

5）数詞

完全な10進数の原理でシンプルですが、数えられる名詞の形式が数詞に応じて変化（複数属格、単数対格、単数属格）すること、一の位と十の位とを逆転して言うこと、数詞に男女の区別があることが重なり、数字表現に出会うと、頭は混乱を極めます。ちなみに、西洋数字をアラビア数字と呼びます（アラビア語ではインド伝来なのでインド数字と呼びます）が、本家アラビア語の数字を掲げておきます。

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
٠	١	٢	٣	٤	٥	٦	٧	٨	٩

6）語順

アラビア語の大きな特徴は、「動詞－主語－目的語」の語順が一般的であることでしょう。動詞は常に単数で、主語の性に一致させます。何のために動詞を13形も覚えたのかと馬鹿らしくなりますが、それは「主語－動詞」の語順の際のルール（性数完全一致）で報われます。

私たちはどの言語にも独自の難しさがあることを知っていますから、「アラビア語」も普通の言語の一つであると信じています。それでもこんな言語を多数のイスラーム知識人は使いこなして彼らの英知を私たちに残してくれましたし、アラブ諸国で今も教育されている事実には畏敬の念を禁じえません。アラブ人は文化を大切にする人たちであることを、特に強調しておきたいと思います。

最後に編集部からはこの拙文の一部をアラビア語に翻訳しアラビア語見本とするようにとの依頼ですが、上記のようなアラブ世界の言語状況の出発点となったクルアーンの冒頭「開巻の章」を掲げるのが相応しいと考えますので、特例としてお許しください。聖典なので母音などの補助記号が文字線の上下についています。

（アズハル版『クルアーン』開巻の章）